

「1日1日読めば心が熱くなる365人の仕事の教科書」の一番心に感ずるのは、3月6日ユニクロ社長の柳井正さんのコメントです。その中で「僕が考える一番いい会社とは、末端の社員でも自分がトップの経営者だと思っている会社。そういう社員がたくさんいる会社です」と言ってます。私も正にその通りだと思います。

仕事には経営者的感覚が欠かせません。経営者的感覚でないとは、担当しているレンタルのお客様が減少しているのに、何の手も打たず傍観していることです。もし自分が経営者なら当然手を打つのではないのでしょうか。

もし自分が解約が多い場合、一体何故多いのか原因を追究しますよね。原因を追究せず傍観は経営者的感覚ではありません。

店長の店経営も同じです。店の売上が減少するのは倒産に向かいます。それよりも世の中より必要ないとのメッセージを貰っていることになります。私たちは世の中に必要な存在になりたいのです。その為には、世の中のことを勉強し、一体何を提供すれば世の中に貢献出来るのか考え続けなければなりません。

話を経営者感覚に戻したいと思います。例えば昔の八百屋や魚やさんは店の真ん中の籠をぶら下げて、その中に売上を入れていました。おそらく、一日の終わりに翌日の仕入れ代金を抜き天候、町の状況などを考え抜き朝仕入れ、一日の終わりに経費を引いて収入を計算していたのではないかと思います。仕入れを間違えれば赤、経費が多くなれば赤です。私たちも同じです。自分自身の売上より仕入れを抜き、そこから経費を控除すれば利益となります。一日一日利益が出なければ生きていけません。経営者的感覚は町の商店主の感覚です。

私たちは全体を見ずに、自分の仕事の範囲しか見えていないことがあります。すると自分のしている仕事の意味が見えなくなって、毎日毎日同じ仕事の繰り返しになってしまいます。こうなると仕事の楽しさは獲得出来ません。

経営者的感覚で仕事をすると、やらなければならないことが次から次に泉のごとく沸いてくるはずですよ。

やはり基本中の基本は顧客の創造・世の中にお役に立つ商品、サービスを提供し世の中に貢献出来る私たちになる。

そこに焦点を合わせば、毎日毎日やらなければならないことが山のごとく出てくるのではないのでしょうか